

図：流入負荷の算定モデル

(2) 水質予測ケーススタディ

第6次水質総量規制の在り方を検討するにあたり、どの程度の汚濁負荷を削減すれば、どの程度の水質濃度の改善が進み、その結果、どの程度環境基準の達成率が改善されるかについて見通しを立てる必要がある。また、自然の浄化能力等を含む総合的な水環境改善対策が求められている。このような背景を踏まえ、以下に示す2つのケースを基本として水質予測計算を行う。なお、発生負荷量の削減率や干潟を再生する面積等、ケーススタディの詳細については、今後、検討を行う。

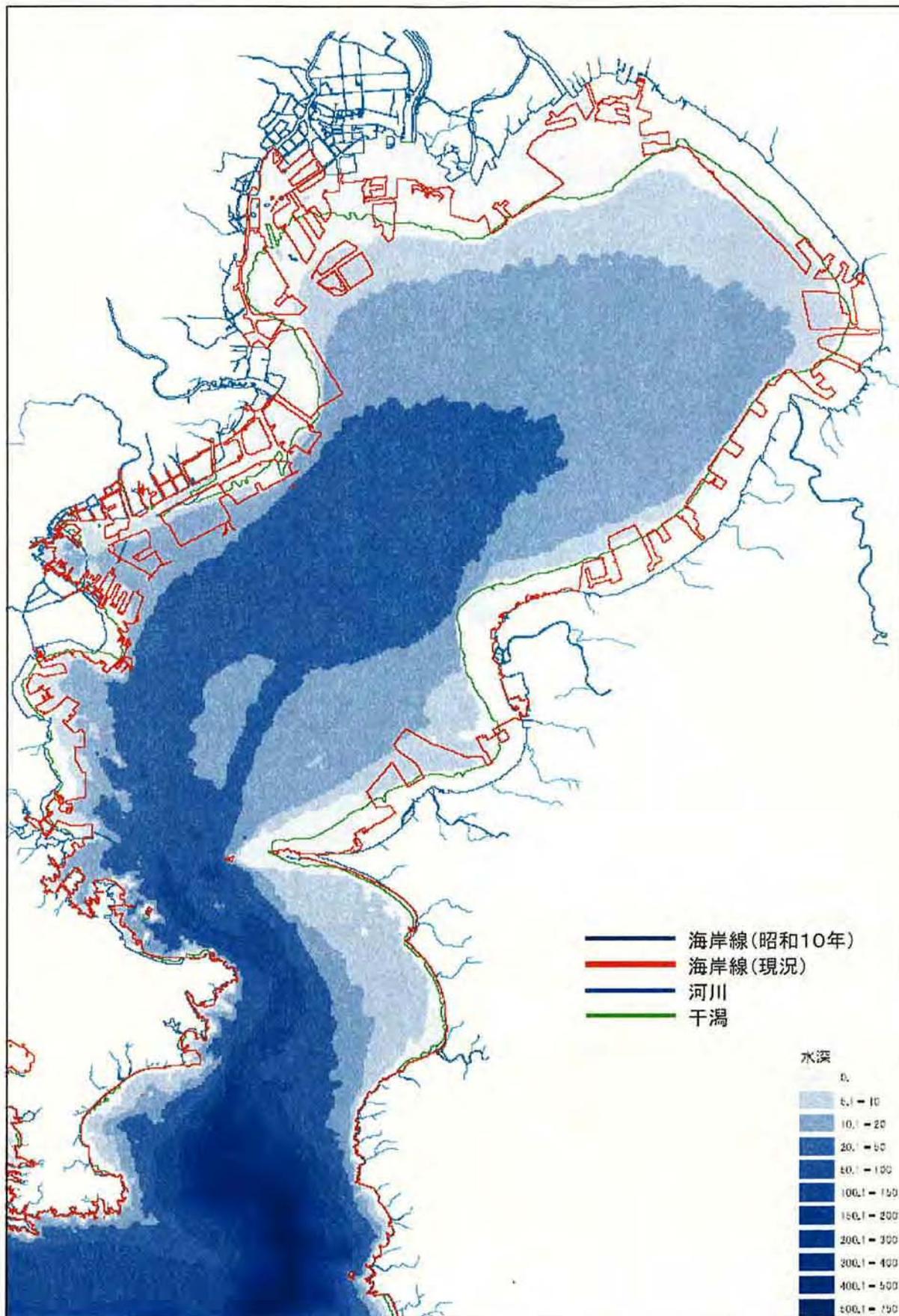
Case1：基準年度(H11-H12)のCOD、TN・TPに係る発生負荷量のさらなる削減

Case2：基準年度(H11-H12)のCOD、TN・TPに係る発生負荷量のさらなる削減+干潟再生

(3) シミュレーション結果のとりまとめ

以上のケーススタディを行い、その結果をとりまとめることにより、汚濁負荷量の削減及び干潟再生による水質改善効果等、以下の項目に関する知見が得られる。

- COD、TN・TPに係る水質濃度及び環境基準達成率の改善効果
- 貧酸素水塊の発生を抑制する効果
- 降雨時の汚濁負荷が水環境に及ぼす影響
- 有機物及び栄養塩類に係る物質収支（底泥からの溶出を含む）及びそれを踏まえた水質汚濁メカニズム等



東京湾の水深図